

妖怪センスの京怪図巻
祇園祭にあわいは騒ぎ

朝戸麻央



富士見L文庫

夏祭りの夜 一

5

第一話 拾われた〈面喰い〉

11

第二話 〈鬼〉、笑う

43

夏祭りの夜 二

108

第三話 〈のっぺらぼう〉の姫

114

夏祭りの夜 三

196

第四話 ひきよせる〈帯〉

202

夏祭りの夜 四

289

第五話 〈狐〉踊る祇園祭

294

あとがき

361

夏祭りの夜 一

— ほう ほう ほうたる 来い。

とこかで聞いたことのある童謡を、誰かが小さな声で口ずさんでいる。

ぼんやりとした表情で左右を見回すと、そこは神社の境内にあるクスノキのそばだった。ひと気もなく、あたりはひっそりと静まりかえっている。

遠くかすかに、祭りの喧騒けんそうが聞こえてくる。周囲には誰もいない。ここには浮遊する淡い光——ホタルを追いかけて来たのだ。だがその光も、いまはどこにもない。

唐突に、瑞希みつきは我に返った。

(……おにいちゃんがいらない)

ようやく気づいた。いやちがう、自分が手を離してしまったのだ。はぐれないように、とあんなに言われたのに。どうしよう、と瑞希は怯おびえながらきびすを返した。

(おにいちゃん。——おにいちゃん、どこ)

兄といっても、血のつながった実の兄ではない。家族というには遠い、だが赤の他人よりは近い「またいとこ」という存在なのだ。知ったのは、瑞希がいまよりもっと大きくな

つてからだつた。

八つも歳の離れたその親類を、瑞希はここから信頼していた。見えない世界に怯える瑞希を理解し、怖くないのだと諭してくれる、ただひとりの人物だからだ。

(おにいちゃんがいつしよじゃないと)

じわじわと足元から恐怖が這いのぼってくる。眼窩が熱を帯び、見る見るうちに涙が視界を覆った。うちは、とぐすつと涙をすすりあげる。

(オバケのこえをきいてしま)

——物心ついたところから、瑞希にはほかのひとには聞こえない音が聴こえた。

たとえば田舎の家で耳にした、いるはずのない人間の立てる物音。縁側をとたとと走っていく音は空耳とは思えぬほど大きかったのに、両親や親戚は気のせいだろうと笑ってとり合わなかった。

あるいは物陰から呼びかける「オイデ、オイデ」の声。ふり向いてもそこには誰もおらず、瑞希が泣きながら逃げ出すと、女の笑い声がうしろから延々と追いかけてきた。

そういったわけのわからない、年齢性別正体不明の変な物音を、瑞希はまとめて『オバケのこえ』と呼んで恐れていた。自分にだけ聴こえるのが嫌で、自分が悪い子だからこんな目に遭うのだろうかとずいぶん悩みました。学校へ行くのも怖くて、朝起きてふとんから出ない日もあった。

だがある日、両親につれられ、はじめて訪れた親戚の家で、耳慣れない家鳴りの音を耳にした。またヘンなオバケがいる、と怯える瑞希に、

「あれはね、家守の仕業なんだよ」

とこっそり教えてくれた人がいた。それが「おにいちゃん」だった。

「いえもり？」

「そういう名前の妖怪なんだ。あわいのものなんだよ」

「あわいのもの？」

ふしぎに思った瑞希が聞き返すと、おにいちゃんにはにこりと笑った。

「そうか、瑞希ちゃんも聴こえる人なんだね。僕とおんなじだ」

「おんなじ？ おにいちゃんもきこえるの？」

「うん。あれはいたずらにはするけど悪いものじゃないんだ。だから怖がらないであげて」
大丈夫だよという言葉と、頭を撫でる優しい手の感触を、瑞希はいまもはっきりと覚えている。ずっと味方がいなかった瑞希にとって、彼の言葉は救いだった。だから、彼の言葉に逆らおうなどとは思ってもよらぬことだったのだ。

(はなさないでねって言われたのに)

お祭りのあいだきちんと面倒を見てあげるんだぞと、おじさんに言われたときは不服そうにしていたけれど、彼は優しい人だから、瑞希の手をずっと握ってくれていた。一年に

一度のお祭りだ、きつとおにいちゃんもはしゃぎたかっただろうに、親戚の子のお守をまかされては、楽しむばかりというわけにもいかなかったろう。

だから、彼のせいではない。手を離れたのは瑞希だった。ほんの一瞬。

さっきまで、祭り特有のどこか浮き足だったような喧騒の中、出店がひしめく道をいっしょに並んで歩いていたので。

的当て、わたあめ、金魚すくい。背の高いおにいちゃんに手を引かれて歩きながら、瑞希は目を輝かせ、落ち着きなくきよろきよろと視線をさまよわせていた。赤くて大きなリングあめを見て、瑞希はあれが欲しい、とねだろうとした。

だが、ふと祭りのざわめきがとだえた。

瑞希は何かに気をとられてふり向いた。出店と出店の合間を縫うようにして、ふわりと蛍光緑の丸い小さな光がよぎったのだ。時期的にはまだほんの少し早いはずだったが、ホテルだ、と瑞希は思った。

ホテルは珍しい。もつとずっと北のほう——たとえば賀茂川と高野川のまじわるあたりではしばしば見られることもあるらしいが、京都の町中ではまず滅多にお目にかかることはない。その小さな淡い光に、瑞希は引きよせられた。

あまりに自然に、するりと瑞希が手を離してしまったので、「おにいちゃん」はそのことに気づかなかった。彼もまた、祭りのにぎわいに注意が逸れていたのでだろう。

好奇心に誘われるまま、瑞希は光の軌跡を追った。そして、気がついたらこの樹のそばにたどり着いていたのだ。

ほんのついでにきましたがたまで瑞希を先導するように漂っていたホテルもどこかへ消えてしまった。それはひとを惑わすという鬼火だったのか、はたまた未練に縛られ、現世に留まっていた儂い魂だったのか。気がつけば祭りの喧騒も灯籠の明かりも、すっかり遠くなくなってしまっている。

(もどらなくちゃ。おにいちゃんも、きつとさがしてる)

そう思ってきびすを返すと、じやりっ、と足元で玉砂利が鳴った。やけに大きく響いたその音に、びくりとして身をすくませる。

「おや。これはこれは、かわいらしいホテルが来たものだ」

突如、声がある場に降ってきた。どこから聴こえたのだろうかとう頭上を仰ぎ、クスノキの葉陰に何者かが隠れていると気がついた。藍色の混じりはじめた夕空を背景に、着物を着た小柄な人影が枝に腰かけ、こちらを見下ろしている。赤い化粧を施した、白い狐の顔。

「ひっ」

瑞希は小さく息をのんで後ずさった。キツネのオバケだ、ととっさにそう思って逃げようとしたのだ。だが、

「ああ、ちがうよ。安心して、これはお面だから」

相手がおかしそうな声で言い、それを証明するように狐面を手で持ちあげた。目元は仮面の陰に隠れてよく見えないが、わずかに鼻の下部と口元がのぞく。指もちゃんと五本ある、人間の手だ。ほっとして足を止めた瑞希に、相手はニッとくちびるを吊りあげた。「甘い水に誘われるのはホタルだけど、おまえはホタルに誘い出されて来たみたいだね」ころろと鈴を転がすような声で影が笑う。同じくらしいの歳の子かな、と瑞希は思った。顔はよく見えないが、手や下駄を履いた足は小さいし、体つきも自分とほぼ変わらない。瑞希はごくんとつばをのみこみ、おそろおそろ訊ねた。

「……あなた、だれ？」

影絵の中で、猫のそれにもよく似た二つの瞳がはつきりと金に底光りした。そう、まるで、ネズミが罫にかかるのを待っていた猫のそのように。

七歳になったばかりの、ある夏祭りの夜。

小さな手を知らずに離してしまった。おにいちちゃん——人混みの中で瑞希を見失ってしまった彼が、のちのちまでどれほどの罪悪感を引きずることになってしまふのか。

そしてホタルの淡い光を追った自分が、いったい何に誘い出されてしまったのか。このときの瑞希は、まだ知る由もなかった。

第一話 拾われた〈面喰い〉

一、

多聞がその生きものと出逢ったのは、四月の第一週のことだった。

今年の京都の春は遅く、三月下旬になっても気温はあがらず、梅も桜もなかなか開花には至らなかった。焦らすかのように桜がほころびはじめ、ようやく年に一度の短い盛りが来たと思ったら、今度はあいにくの長雨が続いた。

そんなわけで、久しぶりに青空がのぞいた今日は、まさに春めいてうきうきとした一日となるはずだった。盆地である京都の冬——骨から冷えるような「底冷え」の期間が長かっただけに、お日様が出ているか出ていないかだけでも随分気分が変わる。やっと春らしい一日になるな、と開店準備をしながら喜んだのもつかの間、正午少し前に訪れた客は、まさに春一番といった面倒事を引っ提げてきたのだった。

「うーん……」

カウンターの台上に広げられた巻物を前に、多聞は低い唸りをあげた。

顔を上げ、目の前でこれこの通り、と片手を拝むようにして頭を下げる男に、嘆息まじ

りのつぶやきを返す。

「そう言われても困るんですが」

「そこをなんとか頼みます。わしと『大書院』さんの仲じゃないですか」

表面上は腰を低くして、七十がらみの男はへらへらとした愛想笑いを浮かべる。男の名は蛇塚ヘビヅカといい、多聞の祖父の代からの顔見知りだが、正直あまり仲良くしたい類たぐいの人間ではなかった。

——ここは四条寺町商店街に居をかまえる古書店「大書院」。

寺町通テラマチドオリの白いアーケード屋根に覆われた四条―三条間は、京都でも数少ない繁華街のひとつに数えられる。シーズン中は特に修学旅行生や海外からの観光客の姿も多く、平日の朝から人通りが絶えない。

飲食店、アパレル、みやげ物店、パチンコ店やゲームセンターなど、あらゆる店が軒をつらねるなかでも、「大書院」は比較的シックで落ち着いた構えをしている。古書店ではあるが、扱っているものは和綴わづじ本や古地図や浮世絵のレプリカなどで、世間一般の「古本屋」のイメージとは少し違う特色カライを持つ。

もともと多聞の曾祖父そうそふの代から始まった店だが、現在はおもに叔父である大悟だいごとふたりできりもりしている。本来の叔父との共同経営者は多聞の父・名彦なひこなのだが、名彦は現在旅行好きの母とともに日本各地を転々としていたため、ひとり息子の多聞が留守を預かる

形になったのだ。あくまで一時的に、だが。

店内の棚に並ぶのは古本ではなく、浮世絵のレプリカや現代の木版刷もくばんすり、あるいはお手ごろ価格のポストカードなどで、一見すると画廊のようだ。もちろん商品がそういったものであるから、持ちこまれるものも通常の書籍とは少し毛色が変わっている。

「ところで、これはどこで手に入れたんです？」

多聞は眉まゆをよせ、カウンターの上に広げられた紙を示した。

やや黄ばんだ巻物状の和紙には、墨で描かれた女のうしろ姿が延々と並んでいる。広げた紙の右端——つまりはじまりは長い黒髪の後頭部、そして三つ並んだ左には、黒髪の間からわずかに耳らしきものがのぞき、肩越しに呼ばれてふり向いたような奇妙な角度がとられている。

つまり「ふり返る」という所作をスローモーション映像のように一瞬一瞬切りとって、時系列に並べてあるのだ。それだけなら単なるパラバラ漫画もどきなのだが、多聞の目にはそれ以上のものが視えていた。もちろん審美眼という意味ではなく。

「ちょっとした知人のツテで。室町の古い蔵を整理すると言うから、手伝いがてらいろいろ頂いて来たんですわ」

悪びれもせず蛇塚は答える。

彼もふくめ、おそらく普通の人間には、長い黒髪の女がふり向く様子が墨で描かれてい

るだけに見えるだろう。だが多聞の目には、黒髪の後頭部に透けて、いびつな形をした頭蓋骨が覗えていた。そしてその頭頂部から、角らしきものがのぞいているのも。

「まさか、断りなくではないでしょうね」

「とんでもない。ちゃんと報酬してもらったんですよ。先方さんも気味の悪い絵だと嫌がっ……あーいやいや、なんでもありません」

慌てたように手をふり、彼はうっかり口を滑らせたことをごまかそうとした。

蛇塚はこうして半年に一度くらい頻度でふらりと現れ、どこかしらから入手した古い紙ものを小遣い稼ぎに売りにやってくる。いわゆるプロの「せとり屋」とは違い、大半が素人目にもわかるガラクタなのだが、ふしぎなことに、蛇塚が持ちこむ物品の中には必ず「いわくつき」の代物がまぎれこんでいた。

「どうでしょう。紙の傷み具合を見るに、かなり昔に描かれたものと違いますか？ パラパラ漫画の巻物なんて骨董としても珍しいと思っただんですが」

巻物は天地のサイズが二十センチほどでやや小ぶりだが、布地の裏打ちや木製の軸などを見るに、巻物としての体裁はきちんとはとられている。紙の黄ばみやカビの具合も、それらしく作られた贗物ではない。ただ——と、多聞はため息をついた。

パラパラ漫画といえば、古くは「ソーマトロップ」と呼ばれる玩具がヴィクトリア朝時代から存在しているが、この巻物はおそらくそんな楽しい目的で作られたものではないだ

ろう。聞かなくてもわかるほどの禍々しい気配が、それを証明している。

「蛇塚さん。何度も言ってますが『大書院』はそもそも骨董品屋ではないし、鑑定も行っません。それを期待して持ちこんでくるのは筋違いですよ」

大書院は古書店であってアンティーク屋ではない。ポストカードや大入り袋は紙製品だから古書としても扱っているが（紙であっても「切手」となるとまた話は変わってくる）、骨董価値というこうという話になると、多聞にはお手上げだ。

「まあそう仰らず。おたくのお祖父さんにお世話になったよしみで」

愛想笑いを浮かべながらも蛇塚は譲らない。多聞がどんなに強硬に出ようが、所詮相手からすればただかか二十代半ばの若造だ、与しやすしと蛇塚が考えているのは明白だった。くわえて祖父の名を出されると、多聞もどうにも弱いところがある。

「それに絵といえば、聞きましたよ。多聞くんも最近はどこぞで怪しい絵を……」

蛇塚が余計なことを口にする前に、多聞は慌てて言葉をねじこんだ。

「——わかりました。あとで叔父にも相談してみますので、ひとまずお預かりします」「ありがたい！ それじゃ、また伺わせて頂きますんで」

してやったりという笑みを浮かべ、蛇塚は弾んだ足どりで店を出て行った。

残された多聞はカウンターの椅子の背に凭れ、眉間を揉むようにして重いため息を漏らす。店内にはかの客がいない時間帯でよかった。

叔父はいま、二階で商品の整理をしている。だが、こんなものを実際に見せて相談するわけにはいかない。売り物にするなど、そもそも論外である。

「まったく、どうしたものかな……」

と、独白めいたつぶやきを思わず漏らしたときだった。

「こんにちは、センセ」

店の入り口から闊達な少女の声がした。聞き覚えのある声に、多聞は見入っていた巻物から顔を上げ、

「やあ。いらっしやい、瑞希ちゃ……」

と、こたえかけたところで絶句した。

店に入ってきたのは、親がいとこ同士——つまり多聞とはまた、いとこの関係に当たたる少女、芳枝瑞希だった。

年齢は十六。花盛りの娘だというのに、ワンポイントのついたTシャツに薄手のパーカを羽織り、くるぶしまでのジーンズのパンツを穿いている。いたってシンプルな格好だ。

肩までの髪はやや茶色がかった色だが、特に染めているわけでもなく、化粧気どころか女っ気もゼロだ。彼女にいちばんふさわしい言葉を選ぶとしたら「自然体」だろう、と多聞はつねづね思っている。

互いに気心の知れた親戚であり、また同じ京都市内に住んでいることもあって、彼女はこうしてちよくちよく店に遊びに来るのだが——、それはいい。

問題は、瑞希が腕に抱えた奇妙な存在だった。そいつはきよろきよろと物珍しげに店内を見渡し、壁に飾られた浮世絵や美人画のレプリカにきらきらと目を輝かせている。

頭にぱつと浮かんだのは、むずかるのを我慢している赤ん坊だ。もちもちとした肌に小さな鼻と口。特徴的な細目は大阪の通天閣にある二代目が有名な、とある幸運の神様を連想させる。頬には猫にも似たヒゲが二本生え、よろこびをあらわすかのようにピンと伸びていた。

外見の特徴をさらにつけくわえるなら、丸い頭には笠を被り、肩には蓑を羽織り、さらに足にはわらじを履いた、どこからどう見ても立派な旅装姿をしていた。

「……風の又三郎？」

が、多聞の渾身のポケは、幸いにも瑞希の耳には届かなかったようだ。彼女は別のことに気をとられていたようで、あー、と声をあげた。

「センセ、それ、新しい作務衣？」

多聞は苦笑した。たしかにいま着ている作務衣は下ろしたてのものだが、そこに気づくとは、相変わらず目敏い子だ。

「似合ってるからいいけど、センセは本当に作務衣好きだねー」

「この格好がいちばん楽なんだよ」

呆れたように笑う瑞希に多聞は肩をすくめる。入り口をちらりと見、ほかの客が店に入ってこないのを確認してから多聞はコホンと空咳をした。

「……それで、瑞希ちゃん。今度はまたどこで何を拾って来たんだい」

瑞希の拾ってくるものは犬猫の類ではない。もっと悪いことに人間ですらない。

「ええとね、このひと、お店の前で倒れてたの」

ねー、と同意を求めるように瑞希が問うと、謎の珍客は瑞希と視線をかわし、にこにことうなずいた。

「このひとって……」

「瑞希はん、わては大丈夫やさかい、下ろしとくれやす」

驚いたことに、大阪弁なのか京都弁なのか、いまひとつ判然としない関西弁モドキでそういう言った。うなずいた瑞希が床に下ろしてやると、待ってましたとばかりに多聞のほうへ進み出て、被っていた笠を脱ぐ。

「ども、ひとつよろしゅう。瑞希はんのお師匠はん」

つむじを巻いた丸い頭が、礼儀正しくびよこんと下げられた。

「いやあ、ほんま驚きやわ。ちゃんとわてが視えて、声も聴こえてはる御仁がこの平成の世にふたりも存在してはるとは」

糸目をさらに細め、ふくふくしい、と表現したくなる笑みをその顔に浮かべる。対照的

に、多聞ははつきりと眉間にしわをよせた。

「……誰が『お師匠』だった？」

それに、いったいなんの師匠なんだ？ 首をかしげていると、瑞希があっけらかんとした様子で多聞を示した。

「このひとがうちの親戚でせんせの、安心院多聞さん」

「ほへえ。なんや寺の坊さんみたいな名前でんなあ」

昔からさんざん言われてきた「坊主のような名前」というひと言に、多聞はびきりとこめかみを引きつらせた。

「それ、センスは気にしてるから言っちゃダメだよ。名乗るたびに『お寺のひとですか』って訊かれるから、最近フルネームを名乗らないようにしてるんだから」

「……瑞希ちゃん」

声のトーンを低く落とすと、瑞希は慌ててこちらに向き直った。

「あ、えーとねセンス。このひとは妖怪の〈面喰い〉さんなんだって」

「めんくい？」

多聞はハテと首をかしげた。種族名だとしても聞いたことのない名前だ。

「そうとす」

「美男美女が好きとか？」

「それ、うちも言ったよ。そういう意味じゃなくて、言葉通りの意味なんだって」
面喰い。面とはつまり顔のことである。それが文字通りというところ——。

とたんに多聞は胡乱な目つきを妖怪に向けた。

「まさか人間の面の皮はいで食べるような存在じゃないだろうね」

だが、〈面喰い〉はアイターと言っように自分の額を叩いた。

「それも瑞希はんが先に言われましたで、お師匠はん。もうちよつとひねらな、ネタかぶったら興醒めや」

「ネタじゃない。そして師匠じゃない」

「心配いりまへん。わてが喰うんは二次元の、紙の顔やさかい」

多聞は首をひねった。

「紙の顔？ つまり、似顔絵とか肖像画って意味かい」

「そうどす。写真もでんな。昔はふいるむだけやっただけども、最近はずニだかカメラだかのぶりんともありますやろ？」

「ゼニカメラ？ ……ああ、もしかしてデジカメのことかな」

「ああ、ゼニタメルカメとかそんな名前でしたかいな。そう、それどす」

「デジタルカメラね。それで、ひとの顔写真とか絵を食べる妖怪だって？」

妖怪はこくりとうなずいた。あつげらんとした返答に、多聞は眉をよせる。

「……それは変わってるな」

「仕方あらしまへん。わては〈面喰い〉やさかい、そういう存在ですねん。黒ヤギさんがお手紙食べるんといっしょですわ」

多聞はそうか、と相槌を打った。そういう存在だと言われれば納得するよりほかはない。「うちも驚いた。面喰いさん、お店の前で竹久夢二の美人画を見ながらよだれ垂らしたんだもん。よっぽどおなか空いてるのかなって」

「そうでんねん。わて、もうここ何日も〈面〉にありつけてへんのどす。ひもじゅうてしゅうて、いまにお腹と背中^{あは}の皮がべっちょんとくっつきそうですわ」

憐れっぽい声^{あは}を上げ、〈面喰い〉と名乗った妖怪は腹のあたりを押さえて多聞を見上げた。要は腹が減った、と言いたいのだろう。

「それで、ここにつれて来たのかい」

「うん。センセだったらなんとかしてくれるかなあって」

目を細め、多聞は額を押さえて首をふる。

「……瑞希ちゃん。うちは交番でも、もののけ生活保護センターでもないんだよ？」

「まあええですやん」

「きみが言うな」

思わずつつこむ多聞に、まあまあ、と慌ててフォローに回るのは瑞希だ。

「面喰いさんは悪くないし……て、なんか変な感じ。そもそも〈面喰い〉って人種名みたいなものだよな?」

「人種名って、瑞希ちゃん。モンゴロイドとか北京原人とかじゃないんだから」

「はあ。まあ、そうとすな。〈面喰い〉ってのは〈座敷わらし〉とか〈小豆あらい〉とかと一緒に個体名やあらしまへん」

「個人の名前はないの?」

瑞希の問いに小首をかしげ、妖怪はへらっと笑った。

「いままで呼んでくれる相手もおらへんかったしなあ。まあ、瑞希はんが好きに呼んでくだすつたらええんちやいまつか」

「うちが名前つけていいってこと? えーと、じゃあ……め、ん、く、い、だし……『衣笠さん』ってのはどうかかな?」

「一文字も合^あうてへんー!」

「……なんで『衣笠さん』なの、瑞希ちゃん」

「や、だってなんかさういふ感じだし」

「うん、まあ、なんとなくわかった」

「わからんといっておくれやす! てゆーか、わてボケふたりに挟まれていつの間にかツコミ役になつとるー!」

「誰がボケだ!」

多聞は思わず手にした巻物でぼこんとカウンター台を打ちつけた。瞬間、あっ、と間のぬけた声が漏れる。

「危ない危ない。大事なあずかりものなのに、雑に扱うところだった」

慌てて巻物を巻きなおすと、瑞希が怪訝^{けげん}な顔で多聞の手元を覗きこんだ。

「——センセ。ずっと持ってるけど、それなに?」

「知り合いから買ってくれと頼まれてあずかった絵^えなだけとね。あまり良いものじゃないから困ってたんだよ」

「絵ってことは掛け軸? でも、それにしてはなんだか……」

瑞希はとまどったように言葉を濁した。興味津々というより訝^{いぶか}しげなのは、彼女もこれが善くないものだ^とと本能的に察しているからだろう。

「気になるかい? 見てもいいけど、少しだけだよ」

多聞は一気に開いてしまわないう慎重に巻物をほどき、瑞希と衣笠(瑞希による命名)の両者に見せてやった。

「……ええと、見返り美人の図?」

瑞希が素直な感想を口にする一方で、ははあ、と面白げな声をあげたのは衣笠だった。「いまだき珍しい形の呪詛^{じゆそ}でんな。こんなもんがまだ現代に残つとったとは」

「そうなんだ」

うなずいて、多聞は再びくるくと巻物を閉じる。さすが妖怪といったところか、衣笠は一発でこの絵の意図を見抜いたようだ。

ひとりだけ理解できなかったらしい瑞希は、ふしぎそうに首をかしげる。

「呪詛ってのろいのことだよな？　これがそうなの？」

「僕も全部見たわけじゃないけど、たぶん巻物をほどいて順に追っていくと、最後に女の正面があらわれるんだろう。そしてそれは、あまり気持ちのいいものじゃないはずだよ」

というより、ストレートに見た人間を不幸にする種類のものだ。おそらく、怒りと憎しみで鬼となった女の姿。

「えっと、不幸の手紙の絵版、みたいなもの？」

「うんにゃ。そんな生易しいもんとちゃいますわ」

眉間みげんにしわをきざみ、衣笠は首を横にふる。

「この手のモンは、持つとるだけでも悪いもんを引きよせるさかい。こりゃあ贈られた御仁は相当、誰かの怨みうらみを買かうとったんやろなあ」

「それじゃ、やっぱり持ち主に返すわけにもいかないねえ」

さきほど蛇塚がうっかり口を滑らせていたが、もとの持ち主も絵のことを不快に思っていたのだろう。だから蔵整理を手伝った報酬として、体よく蛇塚に押しつけたのだ。

(まあ、それをさらに押しつけられたわけだけと)

買取になるのは百歩譲って仕方ないとしても、問題は処分をどうするかだ。商品として売るなどもつてのほかだが、へたに古紙回収に出すのも危険な気がする。焼却するのが一番でっとり早い、果たして通常の手段で安全なのかどうか。

(ここはやっぱり、あいつに協力を仰ぐしかないか……)

「センセのそこ、たまりに変なものを持ちこまれるよね。やっぱりセンセが妖怪絵——」

「いや、この場合それは関係ないと思うよ、瑞希ちゃん」

瑞希の感慨を多聞はすばやく遮った。聞きつけた衣笠がふしぎそうにこちらを見上げる。

「妖怪絵？」

「なんでもない。こっちの話」

どうしたものかな、と顎あごをなでて思索していると、「お師匠はん、お師匠はん」と衣笠がパンザイをするように両手をふった。

「それ、わてに貸しておくれやす」

「だから師匠じゃないって。……どうするつもりだい、衣笠くん」

渡してやっていると瑞希に巻物を渡す。瑞希はさらにその巻物を衣笠にバトンタッチした。

「おおきに」

札を言って巻物を受けとるなり、衣笠は無造作に巻物を開いた。どうするつもりなのか

と多聞たちが見つめる前で、巻物の終わりのほうだけ——ちらりと一瞬、ふり向く寸前の女の顔が見えた——べりっと引き剥がすと、あーんと口をあける。

「あっ」

止める間もなかった。衣笠は破いた紙を端からむしゃむしゃと食べてしまったのだ。

「衣笠くん!」

「衣笠さん!」

驚愕する多聞と瑞希を尻目に、衣笠は口のなかのものを嚥下した。苦い葉でも飲んだかのように洗面になると、ううむ、と唸る。

「よくある女の怨念、ちゅうやつでんな。男に捨てられて、恨みながらひとりで子を産んで育てたものの、数年後にはやり病で亡くなってしもた。死ぬ寸前まで怨みを捨て切れんで、享年は二十代のなかば。さを無念やったんやろなあ、えらい苦い味やわ」

つらつらと述べる衣笠に、多聞と瑞希は同時に目を丸くした。

「そ、そんなことわかるの?」

「へえ。ちなみにこの絵を描いたんは当の女の息子でんな。送りつけた相手は間違ひなく女の夫、つまり絵描きの父親ですわ」

多聞は瑞希と顔を見合わせた。

「……つまり、それが〈面喰い〉の能力ってことかい?」

「そうとす。せやけど心配あらしまへんで、明治ごろの話やさかい。描き手はとっくの昔に鬼籍に入っとるし、送られた相手も言わずもがなや」

しれっとこたえると、衣笠は糞の下から布切れをとり出し、口の周りをぬぐった。

「あー、苦。久々の食事にありつけたのに、マズうてしゃあないわ。そんだけ残された息子も無念やったんやろうけど」

瑞希が衣笠によって破りとられた巻物の残りを拾い上げ、はい、と多聞に渡した。驚いたことに、振り返る寸前の女の絵にはなんの異常もなくなっていた。多聞の目に視えていた角と骨は消え、開かなくてもわかるほどの禍々しい気配も消えている。

「衣笠くん。怨念も『いっしょに食った』のか、それとも『食ったから消えた』のか、とっちだい?」

多聞が訊くと、衣笠はにやりと笑った。

「なかなか鋭い指摘でんな、お師匠はん。食うことは供養でっせ」

「? 食べることが供養なの?」

きょとんとして問い返したのは、多聞ではなく瑞希だった。

「せや。怒りや憎しみは『飲み下す』もんでっしゃろ。怨みつらみを残して死んだ者の無念を汲んでやることだけでも供養になる。形として残す、ちゅうんはそういうことや」

なるほど、と多聞はうなずいた。

「〈面喰い〉がどんなものか、少しわかってきたよ」

「でもそれって、衣笠さんは大丈夫？ 怨みとか食べておなか壊さないの？」

「安心しとくれやす、瑞希はん。わては妖怪やさかい腹なぞ下しまへん。まあ、うまいかまずいかで言うたら二度と食いたない味やったけども。口直しにこの大正美人、頂いてもよろしおすか？」

言いながら、衣笠は期待に満ちた目で棚の美人画のレプリカを指さした。多聞はため息をつく。

「いいわけないだろう。写真でもいいなら家にあるから、それでがまんしてくれないか」

「うひょひよ、おおきにどす」

奇妙な笑い声をあげ、衣笠はにんまりと目を細めたのだった。

二、

「叔父に店を頼んでくるから、先に開けて待ってて」

と多聞から家の鍵を渡された瑞希は、衣笠をつれて安心院家に向かった。四条寺町商店街から東西と南北にそれぞれ道を一本ずれた、古い家屋である。

「お邪魔しまーす」

勝手知ったるとばかりに居間へ足を踏み入れると、カタカタ、ミシミシと部屋のそこかしこで奇妙な家鳴りがした。

出迎えの声に驚くことなく、瑞希は「こんにちは」と笑顔で返す。

多聞の家は玄関に近い一部屋が洋間で、障子で仕切られた奥の二部屋が和室だ。和室の二部屋と壁を隔てた廊下側が台所で、典型的な京都の町家づくりの家だった。

最奥の和室がいつも多聞が寝起きし、仕事や趣味に没頭する部屋だが、家具といえば仏壇と箆筒と戸棚、それから冬にはこたつになる小さな卓しかない。多聞は今年で二十五歳のはずで、まだ「オジサン」と呼ぶには早いのに、どうしてこんなにジジむさいのだろうか、瑞希はたまに首をかしげたくなる。

服装はフォーマルを要求される場以外ではほとんど作務衣だし、おしゃれという言葉とは縁がない。背丈は日本の成人男子の平均よりやや高く、顔立ちも決して悪くないのに、浮いた話のひとつも聞かないのは、そういうところが原因なのだろう。

本人は気楽なものだよ、とあっけらかんとして笑うだけが。

「あれっ、センセ、絵描いてたのかな？」

ちやぶ台の上には硯や筆、墨絵皿や画仙紙の束が置かれてあった。瑞希に続いて部屋に入ってきた衣笠が、紙の束を手にし、感嘆の声をあげた。

「驚いた。お師匠はん、絵描きさんやったんか」

とりとめもなく筆で描かれた花や草、動物や静物の墨絵を一枚一枚眺める。だが絵の中に人物を描いたものがないとわかると、衣笠はあからさまにがっかりした表情になった。

「これは趣味で描かかったものでっか？ それともお仕事で？」

「どうかなあ。センセは趣味だって言うけど、知ってる人は知ってる、ぐらいには知名度あるらしいから。うちのお母さんの話では」

「へえ。そら知ってる人は知ったはるやろうけど。いわゆるギョーカイでは名の知れた、って感じでっしやるか」

「んー、なんかね、センセは『妖怪絵師』って呼ばれてるの」

衣笠はびっくりと反応し、瑞希の言葉をくり返した。「妖怪絵師？」

「うん。基本的に趣味ではなんでも描くけど、仕事で受けるのは妖怪の絵が多いんだって。センセの描く妖怪、いまにも動き出しそうなほど真にせまってるって評判らしくて」

「はあ。お師匠はんは『視える』ひとやし、それらしく描けるんも当然でっしやるな」
したり顔で衣笠はうなずく。

「でも、実際に描くとなるとぜんぜん別の話だと思うよ。センセ、美術の大学に二年ぐらい通ってたけど、もっと前からすごく上手だったもん。ほとんど独学じゃないかな」

「独学でっか。そらすごいな」

瑞希は顔を輝かせた。

「そう、すごい！ うち絵心ないから技術の良し悪しはわからないけど、でもセンセの絵は上手だと思う。ものも風景も人間も、なんでも描けるんだよ」

「ほへえ。ほな、瑞希はんもモデルにならったことありますん？ たとえば『ぬーど』なんか……」

衣笠はうえへへ、と奇妙な笑みを浮かべながらにじり寄ってくる。見た目は無垢な赤ん坊だが、中身はむしろセクハラ中年親父だ。瑞希はあっさり首を横にふった。

「ううん。前にヌードでもいいから描いてって頼んだことあるけど、センセにダメって言われた」

「なななんやてー!? そんな嫁入り前のうら若き乙女が男の前でホイホイ肌を見せるやなんて、お天道様が許してもこのわてが許しまへんでー！」

「え？ だから断られたんだってば」

「当たり前ですがな！」

前言をひるがえし、必死の形相で迫る衣笠に瑞希は目を丸くする。そこへ、ちょうど玄關の引き戸ががらがらと開く音がして、奥の間に多聞が入ってきた。

「ただいま。……なんの騒ぎ？」

「おかえりなさい。いまね、センセにうちのヌ……」

「みみみ瑞希はん、それ以上はあかーん！」

言いかけた瑞希の口を衣笠が慌てて押さえて絶叫する。何をやってるんだ、と果れたように肩をすくめ、多聞はきびすを返した。

「お茶淹れてくるから座って待ってて。衣笠くんにも写真がないか探してくるよ」

「へ、へえ。すんまへんなあ」

衣笠は事態をごまかすようにへこへこしながら、部屋の隅から座布団を引っ張りだし、ちゃっかり畳の上に並べはじめた。それを手伝いながら、瑞希は台所へ向かおうとする多聞を呼びとめる。

「あっ。待ってセンセ、週刊誌はある？ 新聞でもいいけど」

「新聞は昨日古紙回収に出したばかりだよ。週刊誌って？」

「だって芸能人の写真がたくさん載ってるじゃない」

ああそうか、と納得したように多聞はうなずいた。

「でもうち、週刊誌なんて買ってないしなあ。たまに美術系の雑誌か生活雑誌を買うくらいで……。まあ、見てみるよ」

長身がのれんの向こうに姿を消すと、衣笠は安堵したように胸を撫で下ろした。

「瑞希はん、あんさんホンマ天然でんな。けどお師匠はんもボケボケで助かったわ。あー、危ないところやった」

「え、何が？」

瑞希は首をかしげる。瑞希としてはただ純粹に、多聞に描いてほしいだけなのだが。

ややあって、小脇に雑誌をはさみ、手に盆を抱えて多聞が戻ってきた。多聞は衣笠に「はい、これ」と分厚い生活雑誌を手渡す。

「一冊しかなかったけど、大丈夫かな？」

「おおきにどす、充分ですわ。ああ、栄養源やー、口直しやー」

多聞は嬉々として雑誌に頬ずりする衣笠に苦笑しながら、湯呑みと急須、小皿を載せた盆を卓に置いた。

「わあ、お羊羹ひさしぶり！」

黒と緑と黄色の小さな羊羹が品よく三つ並んだ白い皿に、瑞希は目を輝かせる。京都では「いただきますもの」の定番である『とらや』の羊羹だ。

「黄色いのはハチミツ味だよね？ お抹茶味のもらっていい？」

「どうぞ。お茶が熱いから気をつけてね」

急須を持ちあげ、宇治茶をそそいだ湯呑みを手渡される。衣笠はニヤニヤしながら「おかんみたいどすな」などと余計なことを言った。

「……雑誌、返してくれないか」

「いややわー、お師匠はん。ほんの冗談ですて」

「師匠じゃないって。きみ、さっきから言ってるけど、なんで『お師匠』なんだ？」

「へっ？　せやかて瑞希はんがずっと『先生』って呼んではりますやん」
 「だってセンセはセンセだもん。うちの妖怪のセンセ」

黒文字にさした羊羹を口に運びながら、瑞希は答になっていないような答を返す。くとすぎない上品な甘みが口の中に広がり、思わず笑みがこぼれた。

「妖怪の先生ってなに、瑞希ちゃん。まあ……でもそうだね、あだ名みたいなものか」

苦笑しつつ、多聞はさらにもう二杯分湯呑みに茶をそそぐと、そのうちのひとつを衣笠へ差し出した。

「よかったら衣笠くんもどうぞ。飲めるかわからないけど」

「お気遣いのおおきに。それにしても……この家、ようさんいるわりにやけに静かでんなあ」
 何気ないふうを装いながら、衣笠が唐突にそんなことを言った。

（あ、やっぱり気づいてたんだ）

と瑞希はこっそり胸の内を舌を巻いた。

音こそしないが、さきほどからやけに天井がざわついているのがわかる。珍客に対する警戒というより、好奇心が抑えきれずうずうずしている様子だ。知らない親戚の子を見たときの子どもの反応にも似ている。新顔に対しては大抵こうだった。

「センセの家、いつもはもつと賑やかなんだよ」

瑞希の言葉に、天井のどこからかカタカタと同意の音が鳴る。

「客がいるときは僕が許可するまで騒ぐなと言ってあるからね。気に入らない人間は驚かしてすぐ追い出そうとするから」

その発言が不満だったらしく、「カタカタ」が「ガタガタ」になった。心外だと言いたいらしい。なるほどとうなずいた衣笠はズズーと音をたてて茶を飲み干し、多聞に向かって頭を下げた。

「結構なお手前とした」

「どうも。……衣笠くんってお茶は飲めるんだね」

衣笠はへえ、とうなずく。

「水やお茶は摂取できるんですわ。五穀、つまり稲や麦も口に入れることは可能やけども、腹の足しにはならんのだす。わては〈面喰い〉やさかい、あくまで栄養になるんはひとさまのお顔だけですねん」

「へええ、おもしろいね」

感心する瑞希である。やはり人間とは根本からして構造がちがうようだ。

「さあて、ほんならそろそろありがたく頂きまひよ」

拝むように両手をパンと打ち鳴らすと、衣笠は中年女性がほほ笑む雑誌の表紙を、おもむろにべりっとひき剝がした。瑞希と多聞が固唾をのんで見守るなか、口を開けて端からもしやもしやと咀嚼する。あえて似通っているものを挙げるとすれば、シュレッダーだろ

うか。

「……どんな感じ？」

気になっておそるおそる訊ねると、衣笠は目を細めた。

「そうとすなあ。この女性、なかなか人生うまいこと行っているようや。四十代でバツイチ、子どもさんふたり抱えてはるようやけど、なかなかいいお味ですわ」

驚きもあらわに、瑞希は身を乗り出した。

「人生がうまく行っていると、そんなこともわかるの？」

「へえ。手相、うちゅーもんがありますやろ。手と同じで顔にも相がありますねん。手相見さんが肉づきやしわの数やら見て判断しゃはるんと同じように、わては顔の相を食うことによって相手を知るんどす。そういう存在やさかい」

「いい味ってことは、さっきの巻物の絵よりは美味しかったってこと？」

「そりゃ容貌はその人そのものやから。しんどいときは表情にもそういうもんが出ますやろ？　しょぼくれた顔を食べたら疲れた味がするし、人生いまがいちばん幸せ、という笑顔を食べたなら幸福な味がするもんや」

瑞希は今度はうーん、と眉をよせた。いまいちピンと来なかった。

「じゃあ美人の顔を食べたら美人の味がするってこと？」

「いやいや、美醜は関係ないんですわ。顔は結局そのひとの手柄が出るもんやから。どん

なに美人でもひねくれ者は底意地の悪さがあらわれるし、あんまり見られた造作やなくても、人生を楽しゅう過ごしてはったら瑞々しい味がする。そういうもんですねん。第一わてがええ顔やと感じるのと、そうでないと感じる基準は人間さんとは違いますしな」

ふむふむと多聞が横で相槌を打った。

「僕からもひとつ訊いていいかな、衣笠くん。写真と絵じゃどう違うんだらう？」

「媒体の違いでつか。んー、そうとすなあ。被写体が同じやったら基本は変わらんけど、わてからすると味つけに差異があるんですわ。たとえば同じラーメンでも、インスタントと料理人が作るもんは違いますやろ。でも結局、ラーメンは同じラーメンでもある、と。そんな感じやろか」

「ラーメンとはまた俗な喩えを出してくるね」

と多聞は面白そうに笑う。

「つまり、ひとの手になる絵のほうが美味しいってことかな？」

「絶対とは言いまへんけど、絵のほうがわての舌に合うのはたしかとす。せやけど、もちろん絵も写真も、描く人、撮る人の腕によりますえ」

「ああ、そりゃそうか。つまり、インスタントでも作りかたによっては美味しく作れるし、プロが作ったものでも舌に合わないこともある、と」

「その通り。料理人の腕が個性的すぎると大衆受けせえへんこともありますやん。うまい

けど辛すぎるとか、油が多いとか。逆にカップ麺とかは大勢の人に食べてもらええる普遍性がある、と。じゃんくふーどでもたまに食うたら美味しゅう感じるもんですやろ」

「なるほど。しかし、よくよく人間臭い表現をするなあ、きみも。わかりやすいけど」

呆れ半分、感心半分といった様子で多聞は茶をすすする。瑞希は首をかしげた。

「中身がわかるのは人間だけなの？」

「んにゃ、妖怪まがたもですわ。虫やら動物は試したことがないさかいわかりまへんけど」

と衣笠は肩をすくめる。

「じゃあもし、うちの顔写真を食べたらうちの味もわかる？」

「そりやもちろん。まあ瑞希はんのお顔やったらさぞかし甘うてやーらかい果物みたいな味がするんちやうかと思えますけど……」

へっへっへっつとよだれを垂らさんばかりの衣笠に、瑞希ではなく多聞が冷やかな一瞥いちべつを投げる。

「衣笠くん」

低い声音に衣笠はヒッと首を竦すくめ、へらへらとこまかすような笑みを浮かべた。

「味は気になるけど、顔を食べられたら衣笠さんにはうちのことぜんぶ筒ぬけになつてしまうんだよね？」

「いやいや。わてがわかるんは、あくまで顔から読みとれることだけですわ。本当につら

いとき、泣かずに笑わはるひともいはるやろ。わてはそういう細かい機微まではわからん。わかるんは、そのひとがつらいときでも笑えるほど、芯しんの強いひとやということぐらい」

「本当に？」

「へえ。さっき、わては手相にたとえましたやろ。読みとれるんはあくまでそのひとの表面にあらわれとるものだけですわ。だいたいあんさんら人間の感情なぞ、複雑すぎてわてらにはよう理解できんし」

「人間ってそんなに複雑なの？」

「そーらもう。わてら妖怪のがよっぽど単純や。泣きたかったら泣くし、笑いたかったら笑う。ひもじかったら暴れるし、人間に腹立てたらこっそり悪さもする。わてらに世間体なんぞあらしまへんからな」

「まあ、そういうところはむしろ人間の子どもに近いのかもしれないね」

多聞がそう言うと、ずっとなりをひそめていた家鳴りがガタガタ言い出した。ブーブー、と野次を飛ばしているらしい。

「さいでんな。けど、どっちがええか、悪いかやない。人間はんが複雑怪奇にできとるおかげでわてらにもありがたみがある。そういうもんどす」

お茶をすすり、衣笠はふっくりと笑った。

「——じゃあセンセ、衣笠さんのことお願いね」

三和土にそろえた靴に足をつっこみながら、瑞希は言った。

「ああ。家守たちも気に入ったみたいだし、心配しなくていいよ」

「うん。でも、別に心配はしてないよ。センセ、なんだかんだで面倒見いいから」
けろりとした声で調子のいいことを言う。多聞は苦笑するしかない。

「あんまり買いかぶられても困るんだけどねえ」

「……ごめんね、センセ。いっつも迷惑かけて」

「なんだい、急に」

多聞は目を細め、急にしゅんとうなだれた瑞希の頭を乱暴にかき回した。

「しおらしいこと言う瑞希ちゃんなんて、らしくもないよ。いいんだ、僕はきみの親戚のお兄さんで、おまけに『先生』らしいからね。妹分のわがままくらい、いつでも聞くよ」

「うん。ありがと、センセ」

靴べらを使わず、とんとんと爪先で床を叩き、瑞希は外へ出ようとした。その背に向け多聞は呼びかける。

「あ。ちょっとそこで待ってて、瑞希ちゃん」

言い置いて多聞はばたばたと奥の部屋へ引っこみ、すぐに三和土にとって返した。

「これ、おみやげに持って帰りなさい。残り物だけと」

多聞が差し出した抹茶味の羊羹を見、瑞希は喜色を満面に浮かべた。瑞希は抹茶のお菓子が大好物なのだ。

「ありがとセンセー、愛してる」

臆面もなく放たれた告白に、多聞は深々と嘆息してみせる。

「あんまりそういうことは軽々しく口にしちゃだめだよ、瑞希ちゃん。高校生なんだからそろそろ彼氏でもつくつたらどうだい」

瑞希はだめだなあ、と言いつつかぶりをふった。

「センセ、そういうこと言々とオヤジ街道まっしぐらだよ」

「そうなの？」

「そうだよ。だいたい、うちは三代以上家系が続いてる生粋の京女だもん。京女は気位が高いんだから、そうそうしっぽなんか振りません」

腰に手をあて、きっぱりと瑞希は宣言する。多聞はくすくすと笑った。

「だといいけどね」

「けど、センセだったら振ってもいいよ。しっぽ」

「……瑞希ちゃん！」

「あはは、冗談です。じゃあねセンセー。お羊羹ごちそうさま！」

笑いながらひらひらと手をふり、瑞希は引き戸を閉めた。びしょんと閉ざされた戸の前で多聞はまったく、とため息をつく。すると、いつの間に奥から出てきたのか、隣に衣笠が佇たなずんでいた。にやにやとした笑みを浮かべて。

「なんやキラキラ眩まぶしいてしゃあないでんな、あの年ごろの娘さんは」

「……………」

「お師匠はんもなかなか苦労してはんなあ」

「師匠じゃない」

「妖怪絵師に、妖怪が視えるお嬢はん。家守の棲すむ家に、いわくつきの絵も扱うう古書店か。こりやおもろいわあ、しばらくご厄介になりますえ。ええでんな、多聞はん？」

「……好きにしたらいい」

うきうきと鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌な衣笠に、肩を落とした多聞は疲れた声でこたえたのだった。